



題字揮毫・瀬島龍三氏

### 第 8 号

財団法人 大東亜戦争全戦没者  
慰霊団体協議会

〒105-0001 港区虎ノ門3-6-8  
第6森ビル5階

電話 03 (5405) 1838  
F A X 03 (5405) 1839

<http://homepage2.nifty.com/ireikyuu>

振替口座 00140-6-334930

編集人 飯田正能

発行人 柚木文夫

印刷所 ヨシダ印刷株式会社

### 目 次

年頭のご挨拶	1
千鳥ヶ淵戦没者墓苑平成19年度秋季慰霊祭	2
瀬島龍三会長を偲んで	3
遺烈	8
静岡県甲斐一年も開催された日米合同慰霊祭に参列	11
図書紹介・ツルブからの手紙	12
協議会参加団体の紹介の英霊にこたえる会	14
事務局からの報告	16
新入会員及び寄付者	16

## 年頭のご挨拶

会長代行

堀江 正夫



新しい年の初めに当たり、会員の皆様にご挨拶を申し上げます。

瀬島龍三会長ご逝去の後、当分の間、年の功ということで、不肖堀江が会長代行の役を務めさせていただいております。

皆様には、ご家族共々ご健勝で、希望に満ちた新春をお迎えのことと拝察し、お喜び申し上げます。

昨年は、当協議会の生みの親でもある瀬島会長がご逝去にられました。

戦後日本の政財界の指南役としての瀬島氏のご業績は、つとに高名であります。私ども慰霊団体にとっても、

掛け替えの無い牽引役であられただけに、そのご他界は、痛恨の極みであります。亡くなられてみて、改めてその存在の偉大さを痛感する日々であります。今はただ、ご冥福をお祈りするとともに、残された我々一同、亡き瀬島会長のご遺志を体して、戦没者慰霊奉賛事業の普及、永続に、微力ながらも、全身全霊を傾けることをお誓い申し上げます。

本年は、大東亜戦争が終結して63年目の年であります。この長い歲月、我が国と国民は、平和を享受し、それなりの繁栄を謳歌しておりますが、この平和と繁栄が、先の大戦において、祖国の安泰と同胞の安寧を願いつつ戦場に散って逝かれた二百数十万余の尊い犠牲の上に築かれたものであることを、私どもは決して忘れてはならないのであります。今日の平和と繁栄の礎とな

られた戦没者の御霊の慰霊奉賛は、現

にその平和と繁栄の恩恵に浴している我々の務めでもあります。

瀬島会長が発起の先頭に立たれて設立された当協議会の存立意義もそこにあります。

瀬島会長を亡くした直後の新年に当たり、残された私どもは、今は亡き瀬島会長のご教示、ご指導を改めて反芻し、思いも新たに、大東亜戦争全戦没者の偉業を讃え、追悼の誠を捧げるための慰霊事業に、全力を尽くして参りたいと考えております。どうか、本年も皆様の変わらぬご支援、ご協力をお願い申し上げます。

皆様並びにご家族の新しい年のご多幸をお祈りいたしまして、年頭のご挨拶といたします。

平成二十年元旦

財団法人大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会

会長代行 堀江 正夫



新年の靖国神社社頭



靖国神社の奉納大絵馬

# 千鳥ヶ淵戦没者墓苑

## 平成19年度秋季慰霊祭

### 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会

平成19年10月18日(木)、千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会主催の平成19年度秋季慰霊祭が、秋篠宮文仁親王殿下・同妃紀子殿下の御臨席を仰ぎ、澄み切った秋空のもと、菊花薫る千鳥ヶ淵墓苑において厳粛、盛大に執り行われた。

この日、掃き清められた墓苑・六角堂には、秋篠宮、同妃両殿下御下賜の大花籠が飾られ、内閣総理大臣(代理)、江田参議院議長、中曾根元総理、厚生労働、環境、防衛各大臣(代理)、自



御拝礼の秋篠宮同妃両殿下

民、民主、公明、社民各党代表を始め、御遺族・政官民代表者ら数百名の参列者がお待ちする中、定刻13時、陸上自衛隊中央音楽隊の奏楽に迎えられて、秋篠宮、同妃両殿下が御臨場、式は開始された。

参列者全員による国歌「君が代」斉唱の後、菅沼豊子氏によって献茶の儀が行われ、続いて宮下創平墓苑奉仕会会長が式辞を奏上した。宮下会長は式辞の中で、今日我々が享受している平和で豊かな生活は、戦没者の方々の尊い犠牲の上に築かれたものであることを片時も忘れてはならないこと、今なお、国内外の戦場跡に眠る御遺骨の日も早い御帰還をお待ちするとともに、戦没者の慰霊奉賛の灯火を守り、これを次の世代へと伝えるべく、努力を続けていく旨の決意を述べた。

次いで、吉永洲神氏(尺八・岡田純明氏)による昭和天皇の御製、石橋一歌氏(龍笛・逢坂龍信氏)による今上陛下の御製の各献吟、続いて児童合唱団「音羽ゆりかご会」の皆さんによる童謡の献歌が行われ、墓苑の森にしばし哀愁の気を漂わせた。

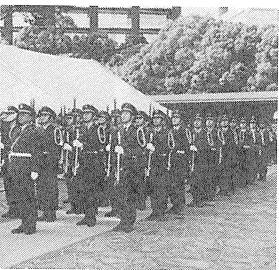
次いで、福田内閣総理大臣の追悼の辞を、大野官房副長官が代読、悲惨な戦争の教訓を風化させることなく、不戦の誓いを堅持し、国際社会の一員と

して世界の恒久平和の確立に全力を尽くしていく旨の決意を述べた。その後、参列者一同起立する中、秋篠宮、同妃両殿下が墓前にお進みになられて深々と御拝礼、戦没者の御冥福をお祈りになられた。

参列者一同も両殿下の御拝礼に合わせて御拝礼を行い、その後、両殿下は、一同がお見送りする中を、御遺族等に御会釈を賜りながら御退場にな



音羽ゆりかご会の皆さん



熊谷所在の航空生徒隊

られた。続いて自衛隊の代表部隊が音楽隊と共に整然と、威容を整えて拝礼し、その後、来賓の献花、参列者の焼香と続き、式典は滞りなく14時過ぎに終了した。

### 追悼の辞

本日、秋篠宮同妃両殿下の御臨席の下、千鳥ヶ淵戦没者墓苑秋季慰霊祭が挙行されるに当たり、謹んで追悼の言葉を申し上げます。

先の大戦が終わりを告げてから、62年の歳月が過ぎ去りました。千鳥ヶ淵戦没者墓苑に眠っておられる35万余の方々を始め、あの苛烈を極めた戦いの中で、祖国を思い、家族を案じつつ亡くなられた数多くの戦没者の方々に心から御冥福をお祈りします。

そして、今なお海外に眠っておられる方々の御遺骨を一日も早く祖国日本にお迎えすることが政府の責務

であると、決意を新たにしております。

今日の日本の平和と繁栄は、戦没者の尊い犠牲と戦後の国民のたゆまぬ努力の上に築かれています。悲惨な戦争の教訓を風化させることなく、不戦の誓いを堅持し、国際社会の一員として世界の恒久平和の確立に全力を尽くしてまいります。

終わりに、戦没者御遺族の方々の今なお変わることのない深い苦しみと悲しみに思いを致すとともに、皆様方の御平安を祈念して、追悼の言葉とします。

平成19年10月18日

内閣総理大臣 福田 康夫

# 瀬島龍三会長を偲んで

## ○偉大な先輩瀬島さん

会長代行 堀江 正夫

かつて陸軍士官学校に学んだ者で、戦後、各界で活躍した人達の数は、決して少なくない。

政界における下村・山本・辻・亀岡・梶山・加藤・宮下・近岡・板垣・久世等の衆参議員、財界における下山・山本・山口その他の諸氏、官界における小長氏その他の事務次官あるいは局長経験者、学会における文化勲章受章の荒田氏等、更に自衛隊における幕僚長・統幕議長等々正に多士済々、戦後の日本の復興再建に絶大な寄与をした。

しかし、これらの中で、何と言っても一際燦然たる光彩を放っているのは、瀬島さん（敢えて「さん」と呼ばさせて頂く）である。

十年間に及ぶ第五の人生に分けておられるが、瀬島さんには、更に特筆すべき第六の人生と、華やかとも言える第七の人生があったように思われる。

その第六の人生とは、旧軍人としての大東亜戦争戦没者の慰霊奉賛の人生であり、これは天寿を全うされるまで続いた最後の人生である。

千鳥ヶ淵墓苑の奉仕をはじめとして、シベリア抑留者慰霊事業、特攻隊戦没者慰霊奉賛事業、そして最後は、三笠宮崇仁親王殿下を名誉総裁に戴く、財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の設立である。これらは何れも旧軍人としての瀬島さんの御英霊に対する深い思いの現れであり、瀬島さんにして始めてなし得た、慰霊奉賛の事業である。

更に旧陸軍の先輩として、同台経済懇話会を設立し、後輩の指導啓発に当たられたことも、忘れることはできない。

最後の第七の人生は、映画・美術会に対する貢献である。

一人の軍人が、十一年間の過酷なシベリア抑留の苦難に遭いながら、これだけ幅広い分野で、しかも最も重要な役割を、余すところなく総て立派に果たされたことは、正に超人的であり、驚嘆以外に言う言葉を知らない。

私は、戦後自衛隊在職当時、瀬島さんの名声は、よく耳にしていたが、親しく接した最初は、昭和五十二年に参議院議員に立候補した時であり、色々との心の籠ったお力を頂いた。

爾来三十年間、折に触れ色々とお力をお借りし、御指導を仰ぎ、その警咳に接し、お力を頂いてきた。

瀬島さんは、どんなに忙しい時も、何時も温顔を以て優しく静かに誠実に私の話を聴いて頂いた。そして、的確に問題の所在を把握され、丁寧に御指導を頂いた。そこには、先輩後輩の関係を離れた、人間と人間との心の触れ合いを強く感じさせられたものである。

瀬島さんが、戦後全く未知未経験のあのような分野で、あのように大きな成果を上げ、立派な足跡を残されたのは、勿論、その明敏な頭脳と卓越した識見に基づく、他の追随を許さない、企画力・調整力・実行力によるところが大であるが、同時に信を他の腹中に置く誠実さ溢れる人間性が、接する人を魅了してやまなかったのではなからうか。それが、数知れない程多数の政界、財界その他各界の有力者の心を捉え、強く信頼されたからであろうと、今更のように畏敬の念を禁じることができない。

私は、この偉大な先輩に親しく接し

てくる事ができたことを、最大の誇りとし、自らの残り少ない人生を、その姿を頭に映しながら、精一杯生きていきたいものと念じている。

心からその御活躍と御貢献を讃え、御冥福をお祈り申し上げ、思い出の筆を擱く。  
(平成19年10月30日記)

## ○故瀬島会長様の御逝去を悼む

副会長 齋須 重一

私共の戦没者慰霊事業は、それを支える各団体会員の高齢化に伴い、その存続のため、各団体を統合して強化を図るべく瀬島会長の永年の構想の下、平成17年7月、三笠宮崇仁親王殿下を名誉総裁として奉戴し、財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会（「全慰協」と略称）が認可され、発足した。私共の父親を、そして多くの同期生を大東亜戦争で亡くした事を、我が子や孫にさえ「大東亜戦争」として素直に言われぬもどかしさは、これで解消され、何よりも嬉しく、また有り難く感じていた次第である。靖國神社に祀られている多くの御英霊も、さぞお喜びの事と存じ上げる。

全慰協設立準備中の平成16年、瀬島会長より、理事長候補等の人事について御下問を頂いたが、当時57期同期生

会の中心的存在であった諏佐道太郎兄

を紹介、推薦申し上げたところ、早速

採用され、創設に尽力された。真に最

高の布陣をもってその基盤確立中のと

ころ、平成18年1月、諏佐理事長は病

氣入院、昏睡の続く3月17日に瀬島会

長のお見舞いを頂いた。至誠会第二病

院に御案内申し上げたが、誠に残念な

がら意識は回復されず、それでも1時

間余付き添われ、主治医にも会われ、

丁重に診療をお願いされた。曰く「諏

佐君は実に真面目で几帳面、真っ直ぐ

な人だ。安心して仕事をお願いした。

丁度乃木將軍のようだ」と。

更にまた、御家族、御子息の事まで種々

御心配を下された。同期生の私には、

こんな有り難いお話は初めてのことに、

残念ながら本人には伝える術はなかつ

たが、御家族、御子息には、事細かく

お話をし、その御厚志に改めて深く感

謝をされた。

その後6月15日、5カ月に及ぶ入院

加療もその効なく、諏佐理事長は亡く

なり、瀬島会長の下、後任の小田原理

事長が孤軍奮闘よく態勢強化に努めた

が、今年に入って瀬島会長も病に臥さ

れ、剩え、6月には奥様を亡くされ、

御悲嘆の程いかばかりか、察するに余

りあるものがあつた。

9月4日、瀬島会長は天寿を全うさ

れ、幽明境を異にされた。

茲に謹んで追悼の誠を捧げ、英霊顕

彰を始めとして数多諸事業に対する御

貢献に対し、深甚なる謝意を表すると

共に、末永く継承申し上げることをお

誓い申し上げる次第であります。

終わりに当たり、また、瀬島会長の

秘書小沼さん、よくその大役を全うさ

れましたこと、改めて厚くお礼を申し

上げます。

◇ ◇ ◇

### ○瀬島龍三様の思い出

副会長 岩下 邦雄

それはもう五、六年前のことです。

特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会副会長

の内田さんから突然お手紙を頂きました。

何事かと思つて開封しましたら、近

く副会長を辞任するので、私に後を継

いでくれとありました。

瀬島会長のことにつきましては、立

派な業績を上げておられることなどは

承知しておりましたが、初めてお目に

掛かったのは、就任の挨拶に伺つた時

でした。その時の印象では、ご高齢だ

が、頭脳明晰な方だと思ひました。

大東亜戦争で、ニューギニアの戦場

から撤退された時、海軍の潜水艦に救

助されて帰還したお話を伺い、海軍に

好意を抱いておられるように感じました。

枕崎市に、沖縄水上特攻隊

の慰霊碑があります。終戦50

年を記念して、地元の篤志家

が中心になつて建立され、爾

来、毎年全国各地からご遺族や関

係者が参列されて、慰霊祭が

行われてきましたが、事情に

より追悼式に切り替えること

になりました。

瀬島会長は、最後の慰霊祭

だから是非伺いたいと言われ、

その意向が地元には伝えられる

と、「瀬島さんが来られる」

と、関係者の皆さんは大変喜

んだそうです。ところが、お

体のことを配慮した主治医か

ら、長途の旅行は無理だと言

われ、已むなく断念され、海

軍出身ということで、私が代

理で参列しました。

当日は、瀬島さんが出で

になるということで、中曽根元総理大

臣など多くの方々からの生花が供えら

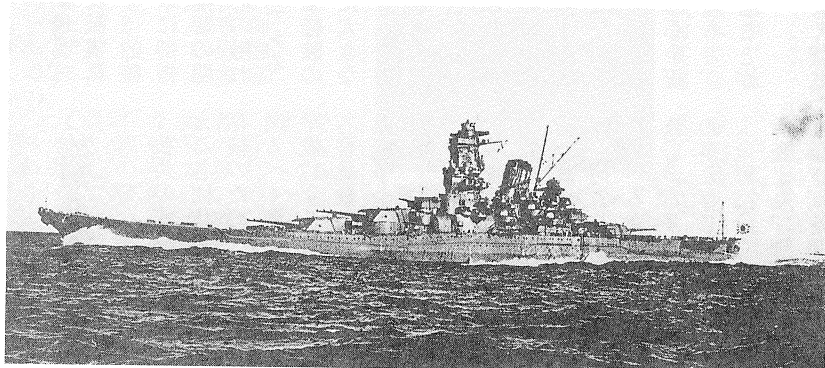
れて、大変盛大な慰霊祭となりました。

私は、今でも瀬島会長には参列して頂

きたかったと、残念に思っています。

それは、戦艦大和が、沖縄に向けて南

下していた時、瀬島さんは聯合艦隊参



昭和16年10月30日、宿毛湾沖標柱間で全力公試運転中の大和（その3）——ワシントン海軍縮小条約による海軍休日期限終了を迎えて、日本海軍が建造した戦艦大和型のネーム・シップである。史上最大の艦砲である45口径46センチ砲を9門搭載、同砲弾に対する十分な防御を備え、速力27ノットを発揮、基準排水量は64,000トンに達し、人類がつくりあげた最大、最強の戦艦であった。なお、この時の状態は69,304トン、151,700軸馬力、27.3ノットである。（潮書房、1981.6.15発行「丸スペシャルNo.52戦艦大和・武蔵」より）

謀を兼務し、鹿屋の基地におられたそ  
うで、水上特攻隊で戦死された将兵に  
対しては、格別な「思い入れ」を抱い  
ておられたと推測するからです。  
一昨年東映が、「男たちの大和」と  
いう映画を製作しました。瀬島会長は  
大変関心を持たれたようです。映画が



完成する数カ月前に、私は会長に呼ばれて事務所に向いましたところ、角川春樹氏や東映会長、京都撮影所長など多くの方が同席しておられました。私は、会長の指図で、戦艦大和について話をしました。

昭和20年4月6日の夕刻、私は偶々零戦12機を九州に空輸中、豊後水道を南下中の戦艦大和、巡洋艦矢矧以下の第二艦隊を発見して高度を下げ、翼を振って武運を祈ったことや、測的所長であった同期生が、両陛下のご御真影をお守りして大和と運命を共にしたことなどを話しました。

瀬島会長は、「是非良い映画にして下さい」と、何度も注文されました。

この映画は大ヒットで、多くの日本人に感動を与えました。

試写会に招待されて、見ていましたところ、エンドロールの箇所、「監修瀬島龍三」と紹介されており、その側に私の名前もあつたので驚きました。

忘れられない思い出です。合掌

### ◇ 故瀬島龍三様

副会長 新庄 鷹義  
瀬島龍三様は、陸士44期生で、私の5年先輩でした。

終戦後は、日本陸軍出身者のトップ

であられ、私がよくお会いいたしましたのは、千鳥ヶ淵戦没者墓苑の事務室でした。私が墓苑の参拝に行きました時には、よく瀬島様がおられて、喜んで色々お話をされました。お話の内容が実に積極的で、事務所の設備なども注意されていました。

一度瀬島様の病室にお見舞いに行きました時には、歩行が出来にくいとのことだけのようでしたが、早々に他界されましたことは、残念に思われてなりません。衷心より安らかなご冥福を念じております。私的なことですが、瀬島様から、時折珍しい物を突然送って戴き、恐縮しましたが、改めて、伏して御礼申し上げます。

先に申しましたように、瀬島様は、戦後日本陸軍出身者の頂点におられ、頭脳明晰な方で、お話に寸分の無駄が無く、この点、私は今でも尊敬して止まない方であります。

健康上お足が悪かったようでも、歩行に苦労されておられたようですが、何時お会いしても、明るく優しく応対していただき、感謝しておりました。

重病になられたことも知らず、お見舞いの機を失ってしまい、申し訳なく思っております。

あの世に行かれましたからは、安らかなお眠りを祈念いたします。

### 頓首

### ◇ 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会 初代会長瀬島龍三氏を偲ぶ

理事 小田原 健児

「財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」設立を生涯最後の仕事として設立に努力された初代会長瀬島龍三氏は、平成19年9月4日逝去された。

故瀬島会長の戦没者慰霊に対する思いは並々ならぬものがあつた。この設立の経過を振り返りながら瀬島氏の人柄を偲びたい。

平成16年7月初めに、借行社役員山長と千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会の小田原は瀬島事務所に呼ばれた。そして、瀬島氏から「来年は終戦60周年に当たる。各戦友団体等の体力が衰えて来ている状況にあるので、この際横断的な慰霊団体を設立して心を込めた終戦60周年記念慰霊祭を行いたい。設立する団体は、将来の存続を確かなものとするため財団法人としたい。そのための基本財産資金提供について、既に一応の目処を持っている。また、団体の名称は、大東亜戦争全戦没者慰霊団体連合会としたい。ついては、この設立に協力してくれ」との趣旨のことを要請された。

もとより我々も旧軍人として、こうした慰霊事業に努力することに異存があらうはずはなく、微力ながらこの設立に協力し努力することとなった。

瀬島氏は、我々にこうした要請をした後、7月下旬には、自ら厚生労働省社会援護局長を訪問して、前述の趣旨のことを陳情された。

このようにして、この団体設立は、瀬島氏が先頭に立って開始された。ここに瀬島氏の戦没者慰霊に関する深い思いと、老いてなお衰えを見せない企画心・行動力を見せ付けられ、我々後輩は、先輩に叱咤される思いがした。

設立準備の作業は、事務局で設立基本計画(案)の策定、準備委員会による各種審議と比較的順調に進められ、平成17年2月初めには設立総会も開催され、事務担当レベルでは、監督官庁に申請する設立申請書内容の事前折衝の運びとなった。ところが、4月に入り、財団法人設立当事者にとって予想もしなかつた極めて困難な問題が生じた。資金提供者の事情から、財団法人設立の根底となる基本財産資金提供が困難となったのである。このような情勢急変に設立関係者は極めて苦慮し苦悩した。

しかし、この困難な状況に立ち至っても、瀬島氏はこの法人設立を何とし

ても成し遂げようとして、我々事務レベルを督励し、また、自らも各方面にこの情勢打開の努力をされた。そうした瀬島氏の督励と努力の下で、結局、基本財産を当初計画より減額し、運用財産から捻出して発足することとなったが、このような経過の中で、瀬島氏の事業に対する執念の並々ならぬものを見せ付けられた。当時既に93歳を過ぎておられたわけであるが、そのような高齢にもかかわらず、自ら先頭に立ち、財団設立を成し遂げようとする瀬島氏の姿には、若き日の大本営作戦課参謀を彷彿とさせる迫力があつた。今静かに振り返ってみて、この財団法人は、瀬島氏なくしては設立が出来なかつたであろうと、つくづく反省させられるとともに、国家の危急に際して、民族の存続・繁栄のため自らの命を戦場に捨てた戦没者に感謝し、追悼する心が国民の胸の奥に末永く続くことを、瀬島氏は今も泉下で希っておられることと拝察する。

◇ ◇ ◇  
○遺言にも「慰霊鎮魂を続けよ」

同台経済懇話会  
常任幹事 野地 一見  
平成十四年度の同台経済懇話会報告書の会長挨拶で、瀬島氏は「伝統の情

# 全戦没者靖国で追悼

## 横断組織で活動永続へ



まま永宮どう  
三笠宮さまを述べられるお言葉、就任に就き、名  
高年齢化が進む中、慰霊活動を統  
関係者の高年齢化が進む中、慰霊活動を統  
統させるかが課題となっている  
—東京都千代田区の靖国神社参集殿

### 戦後60年

先の大戦で亡くなった「慰霊」が十日、東京、丸の内外の戦没者三百万人の靖国神社で行われ、人を追悼する「終戦六十 旧軍人ら約三百四十人が周年記念全戦没者追悼会」に参集した。合同慰霊祭の

開催は戦後六十年で初めて。背景には、戦争体験者の高齢化による各団体の先細り状況があつた。慰霊の心を風化させず永続させようと、関係者の努力が始まつている。

合同慰霊祭を主催したのは、先月設立された「大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」(会長総裁・三笠宮さま、瀬島龍三会長)。慰霊団体の横断組織で、借行社(白陸軍系)、水交会(白海軍系)など計十団体が協力を加わった。三笠宮さまは財団発足に際して、「旧陸軍人の一人として、慰霊祭では瀬島会長が「国を思い同胞の幸せを祈りつつ靖国の神にたのむ」と述べられた。財団という基本財産があるわけでもなく、戦没者の犠牲となられた「事務局は手弁当で運営」を志すのが現状だ。(小田原健児常務理事)だ。

上。参加者はそうして昇殿参拝し、戦没者に思いを寄せた。

靖国に赴いた世代は最も若い人でも七十歳代後半となり、慰霊団体の高齢化が進んでいる。既に会員の減少で、解散する戦友団体も続出。減るばかりのメンバーでは慰霊事業の継続もままならないと、昨年夏、三笠宮さまを中心とした慰霊団体の横断組織をつくる話を持ち上がった。

戦後六十年の夏に間に合うように今年五月の財団設立を目指し、先月「大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」(会長総裁・三笠宮さま、瀬島龍三会長)を設立した。横断組織で、借行社(白陸軍系)、水交会(白海軍系)など計十団体が協力を加わった。三笠宮さまは財団発足に際して、「旧陸軍人の一人として、慰霊祭では瀬島会長が「国を思い同胞の幸せを祈りつつ靖国の神にたのむ」と述べられた。財団という基本財産があるわけでもなく、戦没者の犠牲となられた「事務局は手弁当で運営」を志すのが現状だ。(小田原健児常務理事)だ。

今後は各団体と相談しながら、節目の年には慰霊行事を実施していく方針。また民間団体よりて設立された海外の慰霊碑については実態がつかぬため、野地一見に相談しているケースも多い。5405・10830。



直と、生き残った者としての責任を果すことを基本に、借行社も自衛隊幹部を継承者とする新しい運営を進めることにになりました。陸軍の伝統の継承と慰霊鎮魂の継続こそは、私共が課された使命であると存じております。これを述べておられます。

の使命達成のため、また、祖国日本の真の独立と繁栄のために、私共は相互に、最後まで信念と勇氣を持って、生涯を努力し尽くしてゆきたいものと念願いたしております」と、生涯の決意を述べておられます。

顕彰・慰霊が末永く継承されるよう、基盤を固めることに努力し続けましよう」と訴え続けられました。

終戦60周年を迎えた平成17年には、「畏くも天皇・皇后両陛下には、遙々サイパン島に行幸啓あらせられ、親し

そしてその後は、事ある毎に、また毎年の新年の挨拶でも、「借行社を始め、志を同じくする諸団体・国民の力を結集して、英霊の

く南海に散華した軍民の全ての方々に  
慰霊の誠を尽くされました。誠に感謝・  
感激に堪えないところでございます。

その時、島の人々が「海ゆかば」を斉  
唱して両陛下をお迎えしていたニュー  
ス場面は、涙無くしては見る事が出  
来ませんでした。また、各慰霊団体の  
相互協力と慰霊行事推進の中核とすべ  
く発進させた、財団法人大東亜戦争全  
戦没者慰霊団体協議会の名誉総裁に、  
軍に籍を置かれた皇族として、三笠宮

崇仁親王殿下が就任遊ばされました。  
誠に忝ない限りであります。私達はこ  
の国の、君民心を合わせて護ってきた  
尊い国柄と伝統の文化を、築き続ける  
決意を新たに致しております」と、感  
動と決意を私どもに告げられました。

その後入院されてからも、「英霊顕  
彰の事業を通じて、その誠を後世に残  
し続けて行きたい。皆様方の一層の御  
厚志と御協力を切にお願い申し上げます  
と、私共が見舞いに何う度毎に  
仰っておられました。

そして、平成十九年の新年の挨拶で  
は「何と言っても秋篠宮悠仁親王殿下  
の御誕生により、万世一系の皇統につ  
いての暗雲が、一先ずは晴れたことが、  
最も慶ばしいことに存じております。  
占領下に無理に改悪された、日本の真  
髓である皇室典範は、国の歴史の本質

であり、国民の生きる根源であります。  
皇統が正しく永遠に続いて栄えて行き  
ますように、これから全ての真心を集  
め清めて、改正してゆかねばならない  
ものと存じます。私も九十五歳を迎え  
ましたが、皆々様と共に、命のある  
限り、国体を護り、祖国に捧げた英霊  
の御霊への奉仕に努めてゆきます。皆  
様も、いつまでも相励まし、力を合わ  
せて、この志を果たしてゆきましょう」  
と、決意を表明されました。

この春には、ある天命の予感をお持ち  
になられたのではないかと思います  
が、最後に伺ったお言葉は、ぼつりぼ  
つりでしたが、「みんな、いつまでも  
元気で、国のため、慰霊のことを頼む」  
でした。

そして、もう最後の厳しい夏を迎え  
られてからのことでしたが、瀬島さん  
のお宅に伺って、時々私共の報告や励  
ましの心を伝えてもらっていた秘書の  
方から「今日は比較的御容態が良かつ  
たようで、『みんなに有り難うと伝え  
てくれ』と眩かれ、『ひたすらに国の  
ために尽くしてこれたのは、家の者を  
はじめ、皆さんの御恩のお陰だった。  
有り難う』という意を、途切れ途切れ  
でしたが、はつきりと、仰いました」  
と、涙ながらに携帯電話で伝えて下さ  
いました。

瀬島さん、心から御礼を申し上げます。  
有り難うございました。

### 瀬島龍三氏の主な軍歴

明治44年12月9日 農業・松沢村村  
長・陸軍少尉龍太郎の三男、妻清子  
は陸軍大佐(6期)の女(昭10・6  
結婚)、礪波中学校を経て

大正14年4月 東京地方幼年学校入校  
(29期)

昭和3年4月 陸軍士官学校予科入校  
(44期)

昭和5年10月 陸軍士官学校本科入校

昭和7年7月 陸軍士官学校卒業

昭和7年10月 陸軍歩兵少尉・歩兵第  
35聯隊(富山)付

昭和10年1月〜4月 歩兵学校通信学生

昭和10年6月〜11年8月 満州駐屯  
昭10年12月 第9師団通信隊付  
昭11年8月 陸士予科生徒隊付

昭和11年12月 陸軍大学校入学  
昭和12年11月 陸軍歩兵大尉  
昭和13年12月 陸軍大学校卒業  
昭和14年1月 第4師団参謀  
昭和14年5月 第5軍参謀

昭和14年11月 参謀本部員(作戦課)  
昭和16年10月 陸軍歩兵少佐  
昭和19年8月〜20年6月 兼海軍軍令部部員

昭和19年9月19日 参謀本部総務課付  
昭和19年12月〜20年2月 クーリエで  
モスクワ出張(変名瀬越良三)

昭和20年2月〜6月 兼聯合艦隊参謀  
昭和20年3月 陸軍中佐  
昭和20年7月 関東軍参謀  
昭和20年9月 シベリア抑留  
昭和24年7月18日

昭和31年8月 シベリアより帰国  
強制労働25年の判決



歩兵第三十五聯隊旗(旗手 瀬島少尉)



## 伝える義務

第237次硫黄島派遣隊長  
社会人 新家 智成

表題は、当協議会の参加団体である「特定非営利活動法人ジェイワイエムエイ」(英文表記「Japan Youth Memorial Association」略称「NPOJYMA」)の機関紙(月刊)の題名であるが、その第89号(平成19年8月1日発行)に、第二三七次硫黄島派遣隊の遺骨収集の報告文が掲載されているので、転載させていただいた。

なお、同派遣隊は、平成19年6月27日から7月9日までの日程で遺骨収集を実施し、十六柱の御遺骨を収集することができた。

### ◇第二三七次硫黄島派遣隊

隊長 新家 智成(社会人)

政府派遣初参加

隊員 石垣 拓真(拓殖大学四年)

政府派遣二回目

派遣期間 平成19年6月27日～

7月9日

収集地域 医務壕から壁画付近

収集御遺骨数 十六柱

岩に腰掛けた。溢れ出る汗が、俯いた顔の鼻と顎からポタポタと滴り落ちる。ふと見ると、眼下で蟻が一生懸命巣を作り、二匹、三匹と協力して、落ちる汗を避けながら大きな餌を運んでいる。この島の縮図の一端を見た気がした。そして、暫く見詰めていた。

平成十九(2007)年六月二十七日～七月九日の間、硫黄島戦没者遺骨収集派遣に参加させて戴いた。JYMAの団服の左袖に日本国旗「日の丸」を一針一針縫い付けていく度に、緊張感が高まった。そして、見たこともない迷彩柄の自衛隊輸送機(C-1)に乗って硫黄島へ。轟音のせい、高まる思いのせい、周りの人とは違って機内ではほとんど眠れなかった。

後部ハッチが開き、小さな階段を下りる。ギラギラと照りつける太陽とそれを反射して光るアスファルト、遠くには陽炎が見える。視線を上げると管制塔の「IWO-JIMA」に実感が湧く。

関連書籍を読み、記録映画を見てい

たせいか、激戦のせいで木などほとんど無いイメージがあったので、着いてみて植物あふれる緑の島であったことに納得するとともに違和感がした。今考えられてみれば、この違和感は、壕という時の止まった空間の中で、迎える待つておられる英霊に対し、植物の成長に、余りにも過ぎた時間を感じたせいでと思う。作業は大別して「調査」と「収集」の二つだった。

調査では、井上忠二氏(日本遺族会)、福田昭氏(硫黄島協会)を中心に森の中を進み、崖を下り、英霊が待つていらつしやる壕はないかとつぶさに見て回った。

お二人のお年を感じさせない動きに、亡くされたお父様への、英霊への強い思いを感じ、時折してくださるお話から、壕の見付け方や植物の名前、戦史について学んだ。

収集では、四日目に六十二年間眠っていた新しい壕が発見され、十六柱をお迎えすることが出来た。壕を見たとき、「お前達、やっと来たか」と言われていたようだった。御遺骨と共に出土した弾薬・手榴弾・生活用品。遺留品として武器類は想像出来たが、歯ブラシ・石鹸入れ・食器類などは想像出来なかった。冷静に考えれば、戦つていた場所生活していた場所なのだ。

出てくる一升瓶やドラム缶が、どれだけ大切なものだっただろうか。なににより感慨深かったのが、野球のボール・ハーモニカ・童話の本・碁石といった、余暇を過ごす遺品だった。昼も夜も空襲に耐えながら壕を掘り、訓練をする。そんな過酷な中で、どうやって余暇を見付けたのか。どんな思いで過ごしたのか、考えさせられることは多かった。一般訪島がかなわぬ島に行かせていただいた者として、「伝える義務」が私にはある。

昨年硫黄島を題材にした映画が公開され、私たちが行く直前には、「いおうじま」から「いおうとう」への名称変更のニュースなど、「硫黄島」の名前が知られる機会が増えた。しかし、それでもまだ認知度が高いとはいえない。歴史を知り、英霊の思いを偲び、現状を見つめることで、はじめて未来は創造される。その為に、私に出来ることをしていこうと誓う。

末筆ながら、今回お世話になりました厚生労働省・日本遺族会・硫黄島協会・旧島民の会・自衛隊の方々にご心よ

◇ ◇ ◇

# 変わりゆく日々のなかで

第237次硫黄島派遣隊員  
拓殖大学四年 石垣 拓真

派遣から帰ってきて友達に良く聞かれる言葉がある。

「骨拾いどうだった？」

誰も「遺骨収集」とは言わない。しかも、決まって「そんなことやつて怖くないの？」と言われる。JYMAがどんな活動をしているか説明したり、誘ってみたりもしたが、友達に真剣に話す気にならない。「楽しいから」続けているわけではないし、大変だからといって止めたいたなどは全く思わない。ただ、日本を守るために戦った先人が今も戦地に眠っているのを知った以上、必ずお迎えしなければならぬのだ。

「遺骨収集」というのは、聞いただけではわからない。

私も、始めたきつかけは、沖縄に行けるのが魅力だった。しかし、初めはどんな動機でも、御遺骨と対面すれば誰もが涙を流し、今の自分がいるのは先人のおかげだと思えらう。

今我々の世代の人は、戦争をしたという事は知っているが、国のために

たった一つしかない命を捧げ、その後どうなったかは大抵が知らない。長い歴史の積み重ねの中で、先人の労苦によって自分は生まれ、生かされているということを今回の硫黄島派遣で強く感じた。先人に対して、常に感謝の気持ちを忘れずに生きていきたいと思う。

今回、お世話になりました厚生労働省、日本遺族会、硫黄島協会、旧島民の会、自衛隊の皆様、大変お世話になりました。そして、ありがとうございます。



## ガダルカナル島からの便り

(絵はがき)

ジェイワイエムエイ (JYMA)  
学生代表 (国土館大) 村山かおり  
学生役員 (成城大) 高橋亜希奈

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

現在、私達JYMA隊員2名は、ソロモン諸島ガダルカナル島において遺骨収集に励んでおります。照り付ける太陽の下、ジャングルを歩き、腰ま

で水に浸かって川を渡ったりしながら、現地での作業員達と心を一つにして汗を流しています。

かつての日米両軍の激戦の地と呼ばれたこの島は、驚くほど静かで、花が咲き乱れ、ゆったりとした時間が流れています。作業を通して、暑さと飢えの中で何時米軍に襲撃されるかわからないという恐怖にも負けず、勇ましく戦った先人達の「国を愛する心」「家族を愛する心」を改めて感じ取ることができました。

今回2週間の日程で、35柱のご遺骨を収集し、43柱のご遺骨を現地の方々から受領しました。

彼らが心から愛した祖国、古里「日本」へ一刻も早く私達がお連れ致します。

最後になりましたが、皆様お体には十分お気を付けてご活躍下さいませ。

敬具

平成19年10月9日

ソロモン諸島ガダルカナル島にて  
JYMA (旧日本青年遺骨収集団)

高橋亜希奈  
村山かおり

(財) 大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会 御中



Solomon Islands



米軍水陸両用装甲車、側面の白い部分は日本軍の吸着爆雷攻撃除けのプラスチック系板と思われる。



### 東部ニューギニア遺骨収集に参加して

JYMA 並木 絵美

パプアニューギニア独立国、私は、この国の事も、この国の人も、この国で過酷な戦いをした日本兵がいた事さえも、今まで知らなかった。

日本を出発してから4日目、とうとう作業開始。舗装されていない山道を、車で上下左右に揺られながらどんどん進んだ。移動中ひたすら続くジャンゲルを見ていて、日本兵は、こんな道を重い荷物を担いで歩いて移動していたのかと思うと、何とも言えない気持ちになった。

村に着くと、提供者と交渉し御遺骨を受け取る。若い提供者の中には、御遺骨を多額の金額で売ろうとする者もいた。何も知らない彼らが日本兵の御遺骨を持っていたってしょうがないのに。ただただ見守る事しか出来ないことが悔しかった。そして、歴史が語り継がれる事の大切さを感じた。逆に印象的だったのが、日本兵に教えてもらったと言って、ラバウル小唄を歌ってくれたお爺さんがいた事だ。ここが本当に戦地で、日本兵とパプア人が助

け合いながら生きていた証を実際に耳にし、ニューギニアがとても身近な国に感じた。

不思議なことだが、御遺骨を洗骨場へ移動するため抱きかかえると、人を抱き締めているのではないかと疑うほど、体温に近い温かさを感じた。「死んでも帰れぬニューギニア」と言われるほど過酷な戦場であったニューギニア。日本に帰れる日をずっと待ちわびていたのだろう。この時感じたあの温もりは、決して忘れることはない。

私は今回、見て、聞いて、触れてみて、とても沢山の事を感じ、学び、平和であることに初めて感謝をした。この平和が永遠に続くように、もう二度と戦争を起こさないために、今回聞いたお話や感じた事を、友達に、子供に伝えていきたい。そして、もつとしっかり戦争について学ばなければならぬと感じた。

遺骨収集派遣に参加する事が出来て本当に良かった。

○東部ニューギニア遺骨収集派遣団 (平成19年10月28日～11月9日)

団員 大森陽美(女) 千葉県、東部

団員 ニューギニア戦友・遺族会 藤井昭子(女) 茨城県、東部

団員 ニューギニア戦友・遺族会

団員 遠藤拓弥(男) 東京都JYMA

### 東部ニューギニアからの便り (絵はがき)

団員 工藤幸子(女) 東京都JYMA  
団員 並木絵美(女) 千葉県JYMA  
団員 石垣拓真(男) 東京都JYMA

拝啓 時下益々御清祥の事と存じます。そちらは紅葉の色付きが大分深まったでしょうか。パプアニューギニアは、日本という夏の暑さのような気候で、毎日が快晴であります。

我々隊員一同簡単な言葉ではありませんが、現地の作業員や子供達とコミュニケーションが取れるようになり、国際人として、貴重な体験をさせて頂いております。

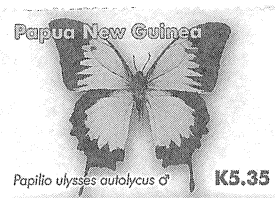
作業現場は、険しい熱帯雨林の中腹にあり、行くだけで困難であります。隊員一同、怪我もなく、全力で作業を行っております。

11月6日現在、94柱の御遺骨をお迎えすることが出来ました。活動を通じて、命の尊さ、戦争の悲惨さを改めて痛感致しました。

これから寒くなると思われれますが、健康には十分御注意下さいませよう、隊員一同心よりお祈り致します。我々も頑張つて、元気に帰ります。



郵便局



切手

(財) 大東亜戦争全戦没者 慰霊団体協議会 御中

並木絵美 遠藤拓弥

石垣拓真 工藤幸子

JYMA東部ニューギニア 遺骨収集派遣隊

敬具

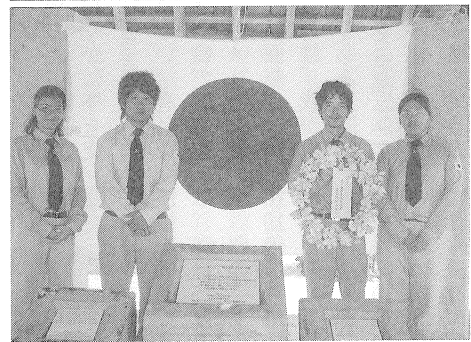
御遺骨に折り鶴を供える。



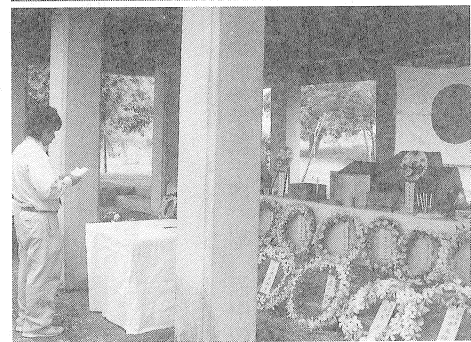
焼骨



JYMA隊員



追悼文奉読 代表 石垣君



慰霊協の献花



### ○静岡県甲飛 —今年も開催された恒例の 日米合同慰霊祭に参列—

「本稿は、甲飛会会報「甲飛だより」第82号に掲載されたものを、同会のご了承を得て転載させていただいた。」

終戦を2カ月後にした昭和20年6月19日夜から20日の未明にかけて静岡市内は、米軍B29の爆撃により2千人に近い尊い命が、一夜にして失われる大きな被害に見舞われた。そして、米軍側もB29が空中接触して墜落、23人の

搭乗員が犠牲になりました。

当時の米国に対する感情をよそに、米兵23人を丁重に葬り、後に日本の犠牲者の慰霊碑救世観音像と並んで、B29の犠牲者の慰霊碑を建立した「故伊藤福松氏」の遺志を受け継ぎ、静岡市在住の医師であると同時に、(財)海原会理事の「菅野寛也氏」が、今年で35回目となる犠牲者追悼日米合同慰霊祭を、6月23日に開催されました。式典は、前日から降り続いていた雨も上がり、薄日が差し込む天候に、菅野先生は挨拶の冒頭「神仏のご加護に

とされた様子でした。

今年も米軍横田基地から米軍兵士10数名が参列し、ご遺族、仏教会の方々や多数の一般市民、2種略帽を着用した我々予科練生20名、3名のラッパ隊を含む陸・海・空の制服に身を包んだ10名の自衛隊員等総勢150名を超す参列者が、賤機山山頂に整列して、しめやかに式典が執り行われ、一同深く頭を垂れて犠牲者のご冥福と永遠の平和を祈願しました。式典の挨拶に立たれた菅野先生は、今年ハワイから二人の方を来賓として招待したことについて、次のよう

に話されました。

それは、昭和20年4月に神風特別攻撃隊の零戦1機が戦艦ミズリー号に体当たりをしたが、その時の日本人搭乗員の遺体を、キャラハン艦長は丁重に扱い、乗組員手製の軍艦旗に包み、海軍の慣習に従って、厳かに水葬をしたことを聞かされ、この事実は、静岡における「故伊藤福松氏」の行為と相通じる、人道的な素晴らしい行為と感動させられた。そして現在、ハワイのミズリー歴史博物館に勤務し、そこを訪れる見学者に、この歴史的事実を語り続け、平和と友好の語り部として活躍



されているお二人「長谷部正寿さんとデニス・マーフイさん」を招待したと説明されました。

式次第に従い、日米関係者の挨拶に続き、前記のお二人からも挨拶があり、その中で菅野先生の行為に感謝するとともに、「日米両国が体験した暗い過去を思い起こし、双方の犠牲者の死が、憎しみから友好へと、移り変って行くことを切に祈ります」と結ばれました。

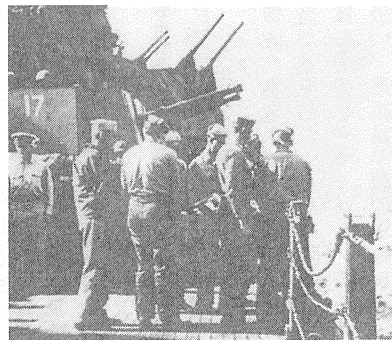
読経の中、焼香、献花、そして、米軍搭乗者の遺品の水筒で献酒（バーボンウイスキー）が行われ、当日参列していた日米の皆さんによる62年目の握手、そして、最後に自衛隊員による日米鎮魂ラッパの吹奏が、賤機山に響き渡り、式典は終了しました。

直会には、全国甲飛会の前田武会長も馳せ参じられ、終始和やかに杯を交



わして語り合い、共に手を携えて歌い、友好親善の意義ある一時を過ごし、日米入り交じったの記念写真を撮り終った後、帰路につく米兵を「帽振れー」で送って幕を閉じました。

毎年、新たな企画を式典の中に組み込み、相互理解を深め、平和と友好を築く大きな行事を35年間主催された菅野先生に、心から敬意を表するもので



(編注・水葬写真)

あります。

甲飛会参加者一同、山頂までの上り坂に負けず、老骨に鞭打ち、今後も参列することを誓って解散しました。

平成19年7月

静岡県甲飛会

副会長 中嶋 孝 ⑬記

### 図書紹介

東部ニューギニア

ニューブリテン島

ツルブからの手紙

若き一兵士から愛する息子へ

明日をも知れぬ我が命、そんな過酷な戦場にあつてなお、愛する我が子、我が妻、我が同胞を思い案じつつ、必死に書き留めた兵士達の手紙や遺文ほ

ど、心を揺さぶるものはない。有名な彼の「硫黄島からの手紙」は、万人をして感動せしめ、敵方のアメリカ人監督が、日本人の側からの映画を作ったりもした。確かに、硫黄島は、我が軍が善戦敢闘した玉砕の島である。同じ玉砕の島でも、ここに紹介する東部ニューギニア・ニューブリテン島を始めニューギニア戦線での死闘は、これに勝るとも劣らない「人間の極限まで戦った」

凄惨な戦闘であった。日本兵の戦死者は、実に15万7千人に及ぶ。

表題の「ツルブからの手紙」は、昭和19年1月14日、ニューブリテン島ツルブ万寿山で壮烈な戦死を遂げた一兵士小林喜三さんが、昭和18年2月19日から11月19日まで、軍事郵便葉書に書いて幼い我が子・征之祐ちゃんに宛てて送り続けた43通の絵手紙「征チャンのシンブン」を中心に、若くして地方

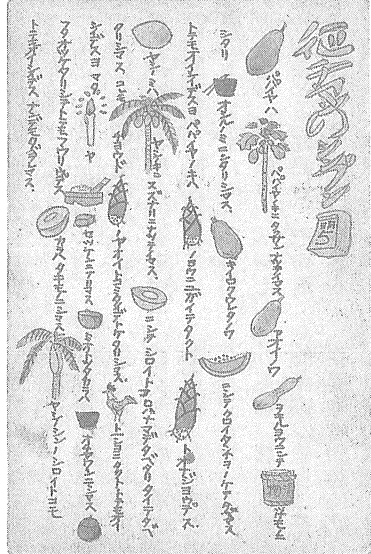
の無名詩人でもあった喜三さんの残した随想・詩文集や若い父親として出征中の喜三さんが、家族に宛てて送った主な手紙なども収録してある。

喜三さんがフィリピンやニューギニアの戦地から軍事郵便に託して息子や家族に送った手紙は、昭和17年3月から戦死直前の昭和18年11月19日までで実に143通に上っている。4日に1度は書いたことになる。いずれの手紙

第一章

ツルギからの手紙

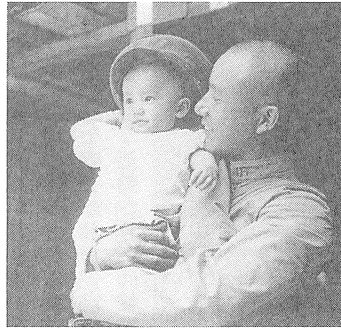
著者 小林喜三



第13信/昭和18年3月5日出—7月5日着

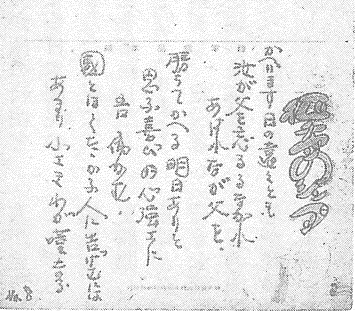
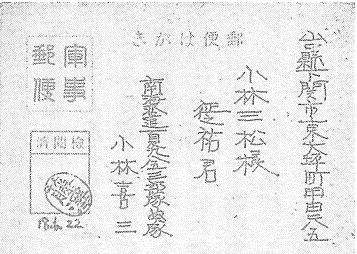


第28信/昭和18年4月3日出—着不明



▲喜三と長男征之祐

も幼い息子に対する溢れんばかりの愛情と望郷の念を秘めている。しかも、なかなか達筆な色絵付きで書かれており、並々ならぬ才能の持ち主であったことが想像される。また、中には、葉書1枚に400字を超える細字でぎつしり書き込まれているものもあり、1枚の軍事郵便に懸命に自分の思いを伝えようとする兵士の姿が思い浮かぶ。



第57信/昭和18年6月22日出—着不明



第15信/昭和18年3月21日出—着不明

そして、最後の軍事郵便が家族の手元に届けられた頃、息子の征之祐さんは、僅か4歳の幼子であった。戦後、父親の記憶すらない征之祐さんが、残された絵手紙によって父親の愛情と息子に託した思いを知り、いつかは父が戦死した南海の島を訪れて慰霊をしたいと念願していたが、平成13年3月定年退職まで下関市財政部長、

引き続き下関市土地開発公社常務理事・副理事長という公職にあつて、その思いが叶わなかったところ、平成17年に厚生労働省主催の「東部ニューギニア戦没者遺児友好親善訪問」団に加わつて、ニューブリテン島ラバウルを訪れ、慰霊祭に参加しようやく悲願が叶つた。その手記なども加えて、平成18年6月30日、著者・小林喜三、編集者兼

発行所 新日本教育図書株式会社  
〒752-0092  
下関市長府扇町9-2  
電話0832-49-1151

是非、ご一読をお薦めしたい。  
(飯田正能記)



## 協議会参加団体の紹介

### ⑦ 英霊にこたえる会

#### 【団体の沿革・結成趣旨】

靖國神社国家護持実現のため、長年にわたり「靖國神社法」の立法運動を展開してきた日本遺族会と「靖國協」は、昭和50年の第75回国会で同法案の提出を見合わせた状況から、靖國神社法案を巡る見通しが非常に困難視されるに至った政治情勢上、従来の靖國神社法の成立を中心として、自民党に対し決断を迫る運動から方向転換して、「新国民組織」を結成し、新しい英霊顕彰の国民運動を展開していくことになった。ここに「靖國協」に代わり、会の名称を「英霊にこたえる会」として昭和51年6月22日に発足、初代会長に石田和外元最高裁長官が就任した。

#### ○「英霊にこたえる会」結成趣意書

戦後三十余年、わが国の平和と繁栄は二百五十万英霊の尊いしづえのうえに築かれていることを、われわれ国民は決して忘れてはなりません。しかし、この繁栄も「魂なき繁栄」といわれ、いまや、政治、経済、外交、教育などのあらゆる面におい

て、重大な転換期に直面しております。

わが国の存立のため、身をもって難局に殉じた幾多の同胞の尊い献身と犠牲に対し、敬意と感謝の誠をつくすことは、国および国民として当然のつとめであります。同時に平和のいしづえとなった英霊のかけがえない生命の重さを銘記し、その遺志にこたえることは、現代に生きるすべての世代の重大な責任であります。それはあくまでわが国の自由と平和を守り抜こうとする日本国民の決意の基盤をなし、また今世紀に二度まで世界大戦の悲劇を体験した人類の悲願につながるものであります。世界いずれの国においても、戦没者に対する慰霊と顕彰が国の最高儀礼をもつて行なわれ、さらに国際的儀礼とされているのは決して偶然ではありません。

しかるに、戦後、わが国においては、戦没者に対する慰霊、さらには英霊をまつる靖國神社のあり方をめぐって久しく不毛な対立と抗争をくり返していることは誠に遺憾であり、ここに民族にとつて、最大の不幸が存するというべきであります。靖國の英霊に対し、国の名において、最もふさわしい儀礼を尽すことは極め

て当然のことであり、国民多数の真情に合致するところであります。靖國神社問題が政争の具とされたり、また軍国主義の復活等と結びつけられて論議されること自体、全く本質を逸脱したものとわねばなりません。

英霊に対する国および国民の基本的姿勢の確立こそ、今日の急務であり、そのためにはもはや政治の場にみゆだねることなく、国民一人一人が勇気をもって行動を起こすべきときであります。国民各層の良識を結集し、英霊にこたえる国民的運動を展開し、その総意を反映させるならば、必ず正しい解決がはかられることを確信いたします。

この国民一人一人の自覚と行動こそが戦後風潮を脱却して、民族の魂をよみがえらせ、わが国の基本方向を確立する唯一の道と信ずる次第であります。(後略)

#### 【団体の目的・事業】

##### 1 目的

本会は、護国の礎となった二百五十万の英霊に対し、国及び国民の尊崇と感謝の誠を表すため、これが公の行事として実施されるよう、広く国民運動を推進することを目的とする。

##### 2 事業

本会の目的達成のため、次の事業を行つてゐる。

- ① 英霊顕彰及び英霊にこたえる各種啓蒙宣伝活動
- ② 靖國神社等における戦没者の慰霊顕彰行事
- ③ 靖國神社における公式参拝の実現
- ④ 戦没者遺骨収集に対する積極的な協力
- ⑤ その他本会の目的達成のため必要な事業

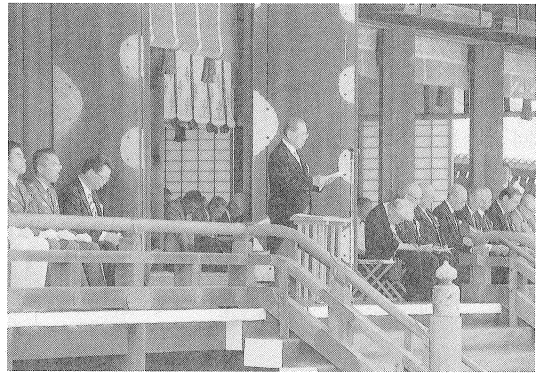
英霊の慰霊・顕彰について、例年実施している事業として、次のものがある。

- ・ 8月15日、本会主催の「全国戦没者慰霊大祭」を靖國神社で執行し、来賓・会員等約六百名が参列する。
- ・ 同日、慰霊大祭に引き続き、本会と日本会議の共催で「戦没者追悼中央国民集会」を靖國神社参道に特設テントを設けて開催する。参集者約二千人。

・ 4月の第1土曜日、本会並びに協賛団体は、靖國神社境内において「靖國神社の桜の花の下で『同期の桜』を歌う会」を開催する。約千五百名が参加する。

・ 靖國神社の「みたま祭」に、本会中央本部と全都道府県本部名を記載





【組織の概要】

(氏名等は平成19年11月1日現在)

本会は、本会の目的に賛同する個人及び団体をもって組織し、中央本部を東京都に、各都道府県に都道府県本部を置き、各市町村に市町村支部を置いておられるところもある。創立時の会員数は、百二十万人にも及び、現在も百万人を超える会員を擁している。

○中央本部

- 会長 堀江 正夫
- 副会長 関口 孝 小田村 四郎
- 運営委員長 倉林 和男
- 運営副委員長 大原 康男
- 同 桑木 崇秀
- 同 佐藤 博志
- 運営委員兼事務局長 富田 定幸
- 特別顧問 古賀 誠
- 顧問 宇野 精一 塩月弥栄子
- 中井 澄子 関口 徳高
- 小堀桂一郎 板垣 正
- 池部 良 鎌田 純一
- 千 玄室 船坂 弘
- 松田 敏江 北の湖敏満

【第二ブロック】

- 東京都 倉林 和男 五十嵐 健
- 神奈川県 神奈川 良平 柴田 俊敏
- 千葉県 千葉 忠行 田島十寸次
- 埼玉県 埼玉 則之 岡部 進
- 茨城県 丹下 一男 小室 満寧
- 静岡県 松井 純 岡崎 一二
- 群馬県 茂木 九平※松本 宏
- 栃木県 欠 稲 三郎
- 山梨県 渡邊 泰 村松 正昭
- 長野県 山田 浩通 市村 明夫
- 新潟県 大澤 喜一 欠

【第三ブロック】

- 富山県 廣明 研正 中川 祐吉
- 石川県 松井 吉二 角田 吉一
- 福井県 近藤平太夫 酒井 啓行
- 愛知県 皿井 吾一 浅井 政盛
- 岐阜県 酒向 憲造 大野みさゑ
- 三重県 水谷 弘 岡田 裕行
- 滋賀県 河本 美典 杉江 周作
- 奈良県 榎 信晴 森田 容啓
- 和歌山県 宮本 芳一 加藤 清
- 京都府 吉村 健治 山内 勇
- 大阪府 吉村 鉄雄 片岡 成之
- 兵庫県 守屋 末治 大野 昌春

【第四ブロック】

- 鳥取県 福田 勝頼 横野 博之
- 島根県 飯塚 敏郎 今岡 元治
- 岡山県 岸本 清美 秋山 頌三
- 広島県 平田 修己 佐々木幸雄
- 山口県 河村 建夫 西村 隆之
- 香川県 丸本 正憲 香川 正人
- 徳島県 竹内 資浩 荒川 宏和
- 愛媛県 石川富治郎 池見 建式
- 高知県 欠 澤本 幸一

【第五ブロック】

- 福岡県 山下 敏明 成清 泰蔵
- 佐賀県 前田 直太 吉岡 弘則
- 大分県 牧野 恭三 遠藤 昭一
- 長崎県 松田 晴一 北村 芳正
- 熊本県 富田 千秋 中村 孝
- 宮崎県 高橋 妙子 日高 純忠
- 鹿児島県 鹿尾尾辻 秀久※脇岡 浩子
- 沖縄県 野澤 章悟 宮城 篤正
- 運営委員 中央三か団体 48名
- 会長推薦 7名
- 都道府県本部 47名
- 合計 102名

【事務局】

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-1-1 靖國神社遊就館内  
電話・FAX 03-3261-7415

○都道府県本部

- 北海道 町村 信孝 遠藤 武

【第一ブロック】

- 東京都 会長及び事務局長 (※代行)

〔氏名等は平成19年11月1日現在〕

本会は、本会の目的に賛同する個人及び団体をもつて組織し、中央本部を東京都に、各都道府県に都道府県本部を置き、各市町村に市町村支部を置いておられるところもある。創立時の会員数は、百二十万人にも及び、現在も百万人を超える会員を擁している。

そのほか、中央本部参加団体有志による靖國神社境内における啓蒙活動や各都道府県本部による啓蒙活動を実施している。このために広報用チラシを例年十万余枚作成し、配布している。

《靖國神社カレンダーの作成》  
毎年、「靖國神社カレンダー」を作成し、本会の維持会員、宮内庁はじめ関係地方公共団体、拓殖大学、國學院大学並びに防衛省統合幕僚学校や防衛大学校、陸・海・空各幹部学校に贈呈している。

## 事務局からの報告

### ○会長代行に堀江正夫氏

当協議会設立以来会長職を務められた瀬島龍三氏が、去る9月4日逝去されました。享年95歳。生前、ご交誼、ご厚情をいただいた皆様から感謝申し上げます。今は亡き瀬島会長のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

9月6日には、御家族主体での告別式が、10月17日には、伊藤忠商事株式会社と亜細亜大学共催での合同葬が、いずれも築地本願寺において執り行われ、沢山の方々が参列して個人の御業績と御遺徳を偲び、別れを惜しみましました。

次期会長の選出には、若干の時間を要するので、当面、堀江正夫副会長に当協議会会長の職務を代行していただくことになりました。

### ○参加団体幹事会の開催

当協議会は、参加団体幹事会を、9月14日(第4回)及び11月16日(第5回)に、それぞれ開催し、来年から発足する公益法人制度改革に備えて、当協議会を始めとする慰靈事業団体の新公益法人への移行のための諸準備について、研究討議を行った。

なお、第4回の幹事会においては、

厚生労働省社会援護局の担当官を招いて、同制度改革関連法令の整備進捗状況とその内容について説明を受けた。

(会議参加団体)

海原会・英霊にこたえる会・太平洋戦争戦没者慰靈協会・千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会・特攻隊戦没者慰靈平和祈念協会

### 新入会員及び寄付者

(9月1日～11月30日)

#### 【賛助会員】

(あいうえお順)

赤松義隆 飯島正三  
石橋美樹 犬塚武道  
内田康弘 片山正見  
川崎節彦 光田隆至  
郡山勝英 斎藤太都司  
坂本融二 富田稔  
中村達雄 奈良暁  
原田敏雄 平野滋治  
松浦健 山崎召三  
藤田豊 (ナコン碑三七奉賛会)

【賛助特別会員】  
一宮成元

【寄付者】(あいうえお順)  
小沼愛 小林正男  
佐藤登久子 鈴木剛一  
西川忠

## 大東亜戦争全戦没者慰靈団体協議会

### ご入会のご案内

当協議会の趣旨にご理解を賜り、戦没者慰靈事業の永続のため、多くの方々のご入会をお待ちしております。

### 当協議会設立の趣旨

過ぐる大東亜戦争においては、多くの方々が戦いに身を投じ、国を思い民族の幸せを希いつつ、戦火に斃られました。その数三百万余人に及んでおります。今日、私どもが享受する平和と繁栄は、これら戦没者の尊い犠牲の上に築かれたものであります。

しかしながら、戦後六十余年の歳月が経過し、これら戦没者に対する慰靈の心が風化しつつあることが懸念されます。また、これまで戦没者慰靈の火を燃やし続けてこられた慰靈諸団体の多くが、会員の高齢化により、その活動の継続が危ぶまれております。

ここにおいて、それら慰靈諸団体の活動を継承し、慰靈事業を永続させ、次代に広めてゆくために、私どもは慰靈諸団体と相諮り、「大東亜戦争全戦没者慰靈団体協議会」を設立したものであります。

私どもは、慰靈諸団体と相携えて、戦没者慰靈顕彰事業に全力を尽くします。

当協議会の会員の区分と年会費は次のとおりです。

- 一 賛助会員(本会の趣旨に賛同する個人)  
年会費 三、〇〇〇円
  - 二 賛助特別会員(特別ご芳志の賛助会員)  
年会費 五〇、〇〇〇円
  - 三 正会員(本会の趣旨に賛同する慰靈目的の法人)  
年会費 一〇、〇〇〇円
  - 四 特別会員(本会の趣旨に賛同する法人・団体)  
年会費 五〇、〇〇〇円
- 皆様のご理解とご協力を、心からお願ひ申し上げます。